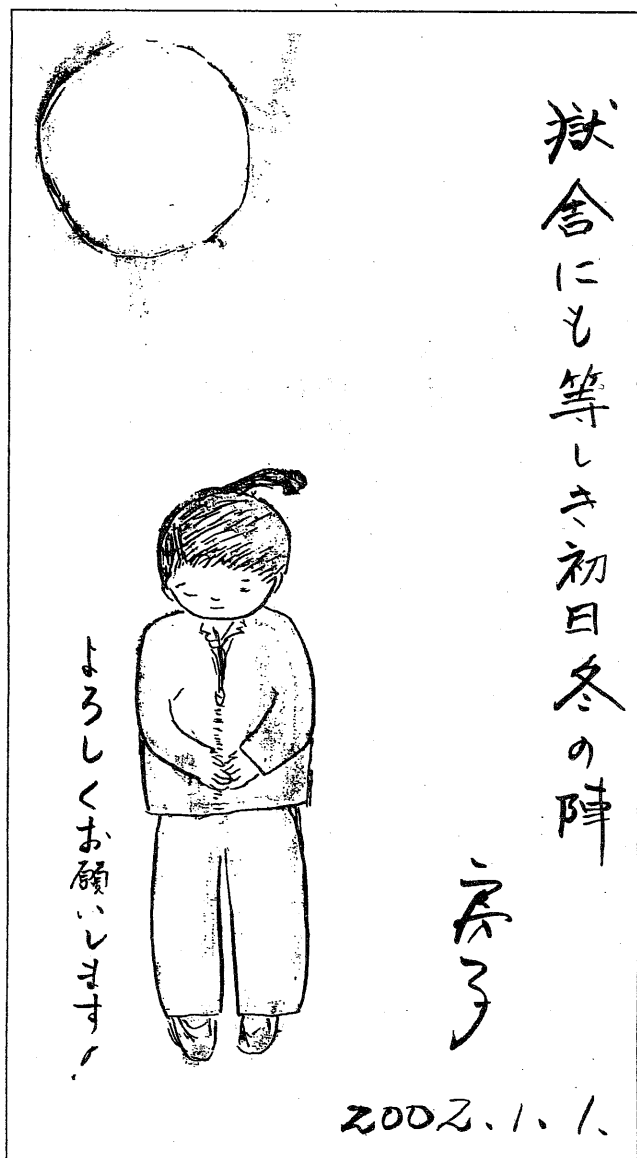


オリーブの樹

第8号

2002年1月29日 شجرة الزيتون

早期釈放！ 重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



目次

- P 2 新しい年と共に 重信 命
- P 3 書評 新年のひとときを
文明を語る本とともに
- P 4 年末年始の東拘のメニュー
- P 6 プリズナージャーナル⑦
- P 14 読者からの声
- P 16 シゲに捧げる「私小説」その6
- P 17 オリーブの樹 Q&A①
- P 19 本の紹介

重信房子さんを支える会



新しい年を共に

重信 命

昨年はみなさんのご支援有難うございました。今年も引き続きガンバリますので、よろしくお願いします。

昨年はあまり出来ませんでしたが、今年は『オリーブの樹』に普通のメディアには載らないインフォメーションを入れていきたいと思ひます。何故かと言えば、日本の大メディアの多くはステレオタイプ。母たちがやってきた事を悪いイメージだけで扱っています。ところが他の世界では正反対のイメージがあります。アラブでは遠くからやってきて、自分たちの「権利」「正義」を信じてくれて、犠牲になってくれて、生命、生活を共にして闘ってくれた人たち、と見てくれる。その差がこんなに激しいとは。どのインフォメーションかで、その差がでるのでしょうか。

『オリーブの樹』を読んでもくれる人は、きっとある程度、サポートしてくれたり、母たちの事を判ってくれたり、全部では無いにしても、少しは他の良いイメージをもっている人でしょう。その意味では本当にありがたいし、その人達を大切にしていきたいです。その上で、その人達に本当の事を知って欲しい。『オリーブの樹』『支える会』はその方向でガンバロウと思ひます。

母たちが連帯していたパレスチナでは、和平交渉が止まり、この1年間でも1千人ちかい死者がでています。それは何故でしょうか。中東地域の事情や、もっと深く歴史から知るためにも、そして、日本とどんな関係にあるか、など。これからも書かせてもらいたいと思ひます。

今は米国の文化、生活観、流行が世界中の国々に入っている時代だと思ひます。日本は自分の本当の歴史と文化を消していませんか。米国の文化が「正義」であるかのように作り直していませんか。グローバリズムというのなら、エコノミーグローバリズムではなくて、人間関係のグローバリズムだと思ひます。国境を越えて人々みんなが、平和的に生きていけることが、ものすごく重要と思ひます。イスラエル・パレスチナ問題も結局は、世界中の人間の問題であり、人間の問題であると思ひます。

人間関係の問題は様々あるでしょう。例えば、反省は自分の問題を認めて、初めて進むでしょう。自分の間違いを認めなければ、また、同じ間違いを起こす原因になると思ひます。気になる事がありました。1つは自衛隊を海外に送り出すようにしたこと。あまり特別な事に見えないかもしれませんが、戦争を見てきた私からすると、「戦争をやらない権利」がどんなに重要か。「持っているものには価値が無い。無くして初めて価値がわかる。」アラブの諺です。

せっかく日本は平和的なので、この中でどうやって「マテリアル(物)」ではなくて「人間」のための国にするかがトライできるのに。私はまだ、日本に帰ってきたばかりだから、日本と日本人をもっと知るように勉強していきます。その上で、もし力があるなら、日本と人間のために一緒にやっていきたいと思ひています。

今年も共にガンバリましょう。

書評

新年のひとときを文明を語る本とともに

重信 房子

「あなたの仲間たちが同じ食事、同じ条件で居り、壁さえなければ、一緒に正月を迎えていますね」などと、弁護士さんに手紙をもらいつつ、新年を迎えました。新年は、「文明」について語る本と共に過ごしました。「現代が受けている挑戦」(A.J. トインビー著)、「第一次文明戦争」(M. エルマンジェラ著)、「文明の衝突」(S. ハンチントン著)などです。

地球というのは、億単位の歴史の中で、ついこの50年に自然も人間も危機に向かって落下しつつあるのを、改めて実感する機会となりました。20数億年前に生命体が現れ、1億数千万年前に哺乳動物が現れ、ヒトカントロプスが現れたのが100万年未満前。自然に人間が支配されながら、自然を崇拝して1万5千年前、定住農業や共同体が始まり、国家や人間が、自然に対応しえるようになって5千年位。それから人間の道徳や宗教、精神世界が形成されて数千年。地球と人間の共同体と技術、そこから生み出される文明のいくつかの交流を、立ち止まりつつ眺める新年となりました。

悠久の流れは、産業と技術革新と商品化で、「便利」と同じくらい失ってきたものも大きな歴史だと改めて思ひます。利潤にすべてを還元する人と人の結び合う社会の中で、大気から大地、共同体まで、この数十年の間に、後のない時代に私たちが生きていることを実感します。

そんな中で、2001年9月11日によって世界が変わったのだろうか?と改めて思ひます。自然成長的なこれまでの危機に代わって、「反テロ」の名で、国益をより目的意識的に追求する意図があらさまになった、千年紀の始まりの21世紀の1年目ではなかったのだろうか?9・11は、「彼ら」にとって絶好のトリガーになったのだと改めて思ひます。こうした弱肉強食のルールを前提にして、三権分立でなく、三権アメリカ独占のルールは、いつまで続くのか疑問です。この道は、アメリカの文明価値を地球大に拡大しようとする過ちとして、ハンチントンの警告する「衝突」の道でもあります。でも、ハンチントンも西欧文明の優位を守り、解決するためには、西欧の軍事的優位を保ち、西欧民主主義を他

の社会に強制し、自国には移民や難民の数を制限して、アメリカ本国自身は、多元的文明国としてはならないと考えていることにおいて、ブッシュの論理と同一線上にあります。違いがあるとすれば、アメリカの西欧文明の価値観を地球規模で急いで普遍化することを目指すブッシュと、「衝突」として避けようとするハンチントン、という方法上の違いでしょう。

こうした西欧の傲慢さを問う第三世界やイスラム世界からの民主主義者としての知性から、エルマンジェラは告発しています。世界銀行、IMFなど、「構造調整」という名の歴史的な犯罪に加え、ポスト冷戦の80年代から90年の頃、南北問題として文明の問題を真っ先に語ったのは、こうした第三世界の知性の人だったというのを改めて学びます。南々協力、南北NGO協力など、違ったパラダイムを求めることによって、良心までも商品化する市場主義から、地球や人々の共同体を変えようとする住民、住んでいる人々に根ざした民主主義のありようが模索されています。(それは、パレスチナの民族解放運動の系譜でもあります。)エルマンジェラの違った視点からの文明観を学びつつ、思ひました。

現代の私たちは、グローバル化の中で、早く近く情報を知り、数十年前には、届くことのない地域のことを、すぐ隣の事のように知ることが今は出来ます。それはまた、「彼ら」が与えたい情報は与えるし、商品価値になる情報は流れてくるけれど、必ずしも公正なものではないのは、忘れないようにしたいと思ひます。人と人が結び合うために必要な「彼ら」に都合の悪い、商品価値のない情報、私たちが知るべき情報は、入ってこないことがあることを忘れないようにしたいと思ひます。目先のことにとらわれずに、今年、2002年起こる様々を歴史的、相対的に位置づけて見るように心がけたいと思ひます。相対化して見る自身の主体を、逆に問うように検証しつつ。2002年は、リッダ闘争から30年目の時でもあります。歴史的相対化した位置から、リッダ闘争を捉えることによって、自らの限界を直視する節目にしたいと思ひます。それは、闘った先達への尊厳を損なうものではないのですから。

プリズナージャーナル⑦

重信 房子

第11回公判出廷の記 12月12日

平和を殺すな!

アフガニスタンへの米国の「報復戦争」を利用したイスラエル・シャロン政権の暗殺政策は、激しくなってきました。そして、その分パレスチナの解放運動は、反撃を強いられ、攻防が繰り返されています。12月1日、エルサレムなどで、パレスチナ人による自爆攻撃が連続的に発生しました。国家が「暗殺」を政策として、自分達の尊敬するリーダーを次々と殺していく時、健全な良心を持つ若者は、自分の命を捨てても反撃したいという想いにかかられます。そのことを、誰が責められるでしょう。この攻撃に対して、シャロン首相とワシントンで会談していたブッシュ大統領は、「アラファト・パレスチナ自治政府議長と自治政府は、テロと闘う覚悟を単なる言葉ではなく、行動で示さなければならない」と、アラファト議長に「テロ犯」逮捕を要求し、アメリカ・イスラエル側である彼らが言う「反テロ」の側に立つのか否かを迫っています。国家政策としての暗殺など、イスラエル側の戦争政策には触れない、一方的なイスラエル寄りの立場を示しました。アメリカ国民と世界に「パレスチナ解放運動はビンラディンらの無差別テロと同一線上にあり、悲惨なテロ攻撃と闘っているイスラエル・シャロン政権」という図式を、論理のすり替えによって宣伝しました。アフガン報復を、イスラム教や中東全体の解放運動や反米勢力の一掃として進めようとする、中世キリスト教の十字軍と共通する文明の制圧破壊の危険な企てを感じます。シャロン首相は米政府のバックアップを得て、アラファト自治政府を12月4日「テロ支援団体」と認定して、平和と人間性へのジェノサイドを開始しました。彼は、平和そのもの、オスロ合意そのものを破壊しようと、合意の瞬間から狙っていて、その時を得たように、戦車、武装ヘリ、ミサイル、爆撃機でパレスチナ自治区への軍事支配を強行しています。

出廷の朝

「殺すな! 平和を殺すな!」12月4日緊急声明を発した後、初めての出廷です。寒い冬、ラマダンはまだ続いています。パレスチナ、アラブ、中東の人々、

友人達を案じながらの今日の出廷です。

風は冷たく、陽射しは高く、晴れ渡った空は、早朝から今日の晴天を伝えています。高速に入ると、ガラス越しに照りつける陽射しは、顔面を直射して、ヒリヒリするくらい熱く痛い。そんな中を地裁に到着。13時20分104号法廷、私の着席を確認すると、傍聴人の入廷が促され、人々が流れるように入ってきました。

前回は、午前中だったせいもあって、空席が目立っていたのですが、今回は64人とほぼ満席。小さくなったジャーナリスト席の一角のみ空いています。いつもの懐かしい友人達、大学の友達、新たにみえた友人もいます。大学の或る友人が昔と変わらず若すぎて「あれ! 息子が弟みたいだ」と、思わず弁護士に問い合わせてしまいました。大学の先輩もずっと公判傍聴に来てくれています。「自分が学生運動に誘った責任があるから…」と、あの責任感の強さで、傍聴しているのではないだろうか、ありがたい。ウニタの小父さんも元気そう。ありがたい。関西の友人達、支える会の方々、若い人々、娘達の友人達も、ありがとうございます。「前向いて」と看守に注意されながら、みんなの挨拶に頭を下げるのみです。ごめんなさい。大声で挨拶できないのが心苦しいですが、了解してください。「全員入廷しました」看守が大声で確認すると、開廷が告げられ、証人の出廷が促されました。

本日の証人はYさんです。Yさんは、80年代迄日本赤軍で活動していた人で、その後組織を離脱し、自首した人です。

Yさんとの再会

裁判長から証人出廷が促されたのに、なかなか証人席に来ないので、傍聴席の皆の視線の先、丁度私の背中の方を振り返ると、Yさんがゆっくり歩いて証言席に向かうところでした。腰が悪いそうで、ゆっくり証言席に立ちました。少し、髪が薄くなった以外、昔のままの体格という感じです。

裁判長が宣誓を促して偽りの事実を述べたら偽証罪になると警告し、同時に椅子に座るように言いながら、腰が辛かったら言いなさいと配慮を示しました。

即、西谷検事が尋問を始めました。

検事「証人は、昭和48年6月頃、日本を出国し、レバノンに行きましたね。」

Y証人「はい。」

検事「何故ベイルートへ行ったのですか?」

Y証人「パレスチナ革命運動を支援する為です。」

検事「ベイルートに行ってから、どうしたかをお聞きたい。」言葉使いからして、西谷検事は丁寧な口調です。

Y証人「あても無く、各派の事務所を訪ねて、参加する所を探していました。」

検事「各派と言った中に、PFLPもあったのですか?」

Y証人「はい」

「PFLPの事務所に行った時、誰と会ったのか?」「担当の人と、直ぐ会えたのか?」との質問に「当初会ったのは、誰とかでなく、外国人なので国際部でしょう。暫らく待たされ、担当者の名前も覚えていない」と返答しました。それに対して「ジャイルではないですか?」と更に質問をしました。

Y証人「そういう名も居ました。」

検事「国際部の担当者と会って、PFLPが受け入れてくれたということですか?」

Y証人「はい。」

検事「なぜ、国際部が受け入れてくれたのですか?」

Y証人「国際支援で、外人が必要だったと思います。」

検事「PFLPに受け入れてもらって、ベイルートでの住まいは?」

Y証人「とりあえずは南部の方に居ました。」

検事「PFLPが用意したのですか?」

Y証人「はい」

検事「生活費用もPFLPが用意したのですか?」

Y証人「はい。」

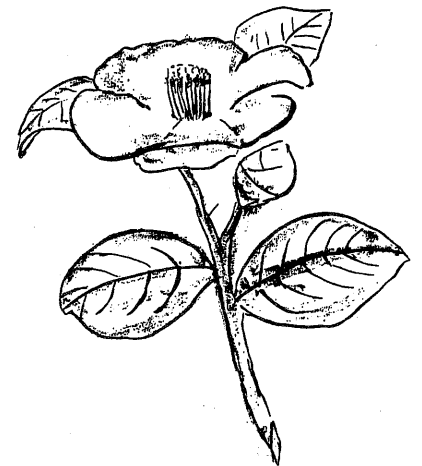
検事「証人のPFLPでの立場はどういう立場ですか?」

Y証人「PFLPの支援ということで、大雑把には、PLOの中のパレスチナ支援のグループに、配属されたと思います。」

当時はPFLPのボランティア

検事「あなたの立場はPFLPを支援する人、言葉として傭兵ですか?」

Y証人「はい、そうです。」



検事「当時のPFLPの関係者で関わりを持っていたのは?」

Y証人「アブハニです。」

検事は、「アブハニのフルネームがワディア・イリヤス・ハダドだったか?」又、「ハダドは国際部の部長だったのか?」「PFLPの創設者の一人だったのか?」「その他に、誰を知っているのか?」「国際部の副部長のザイルアラジャー、他にアジーズという人を知っているか?」「アブハッサンと呼ばれる人を、知っているか?」「丸岡修もアブハッサンと、呼ばれていたのではないか?」と質問し、検事はY証人のPFLPとの関わり、更にそこでの関連する人物について尋ねました。

Y証人は、「丸岡さんに関しては、ある時期はそういう名前だったし、アブハッサンという名は星の数ほどいるので、よく分からない」と答えました。

「重信被告を知っているか?」という検事の質問に対し、1973年の暑い頃、PFLP国際部の紹介でベイルートの公然オフィスで、会ったことを証言しました。「重信被告は信頼されていたか?」という当時の、私の位置と役割を浮かび上がらせようとしているようでした。

Y証人は「リッダ闘争のあと、残っていた人の中に重信さんが居たので、リッダ闘争の評価で、PFLP公然政治部門と共同していたと思う」という主旨の事を述べると、「信頼していたのではないか?」とたたみ掛け「厳密な意味で、政治的信頼関係が有

ったと思う。」と答えました。

検事は、「重信被告と会いY証人が赤軍の一員になりPFLPを支援したというが、具体的には、どのような活動なのか？」との質問に入りました。

Y証人「日常的には南部の前線にいて、有事、特に外国人にむいた軍事行動、準備活動などを手伝っていた」と、答えました。

検事「外国人がやるのに適した事と言うのは？」

Y証人「アラブの敵として、イスラエルを攻撃対象にした調査活動。アラブ人がやるのが難しいので、東洋人が重宝と言う事で…」

検事「攻撃対象としては、どういう対象ですか？」

Y証人「対イスラエルの領土内で軍事作戦を遂行するとか、ユダヤ人の利益団体・航空機エル・アルオフィスや大使館領事部・領事館の調査などです」

ツパマロスとの関係

検事「ツパマロスについて知っていますか？」

Y証人「映画とかで知っている。直接的には知らない。」

検事「ツパマロスの関係の調査をしたことがありますか？その代表のホセを知っていますか？」

Y証人「知りません。」

検事「ハダド事務所に呼ばれて、ホセに紹介された事はありませんか？」

Y証人「知りません。」

検事「誘拐作戦の関係で、ホセとアブハニ事務所です…」

何かのりの悪い質問がずっとあり、それをY証人が否定していく話が続いたところで、たまりかねた大谷弁護士が介入しました。

弁護士「本件と関連するのですか？」

裁判長「正式な異議として、弁護士から出されているのではないが、簡潔にして下さい。」と、検事の質問に介入しました。

これまでの話で、Y証人がかつて調書で喋った内容であり、それをなぞるか、同主旨の話をY証人が、否定しているということが分かりました。

検事「端的に聞きますが、ウルグアイ大使館調査に行った事無いですか？」

Y証人「ないです。」

そこで、始めからそれまでの質問の主旨が、Y証人の当時の位置を通して、PFLPの軍事活動のあり方と、日本赤軍の関係を、一般的に証明しようとして、その一環にツパマロスも、登場させたかったのでしょう。

やっと、本題に

検事「昭和49年5月ウィーンに行きましたか？」

Y証人「はい」

検事「行く事になった指示は、何処でどう受けましたか？」

Y証人「ワディア・ハダドのペイルートオフィスで受けました。ウィーンに同行して、Gに会ってくれということでした。」

検事「何の為に？」

Y証人「ヨーロッパで資金調達の為の『翻訳』の調査報告を受けて、下見をして、ワディアに報告してくれということです。」

検事「ハダドから誘拐計画を聞いたのか？」と細かい質問が続き、Y証人から「ウィーンに行って調査することと、重信さんに同行する事、行けば分かるという風に言われていたこと、『翻訳作戦』と言われていたことは、その時は判らなかつたこと」などが答えられました。そして西谷検事は、「ウィーン空港でGさん、Kさんに会ったのは初対面だったのか？」「重信被告が紹介したのか？」等問い、Gさん、KさんとY証人が、ドイツ経由でパリに行ったことを確認した後、検事は「重信被告はどうしましたか？」と聞きました。Y証人が「そこで別れました」と答え、検事は「重信被告は何処に行ったのですか？」と続けて尋ねました。Y証人が「重信さんは、リビアに行ったと思います」と言うと、検事は「それを行く前に聞いたのか？何処で聞いたのか？」と質問し、Y証人が「何処で聞いたのか思い出せない」と答え、検事は「重信被告はリビアに何しに行ったのか？」と尋ねました。Y証人が「ハイジャックでリビアに行ったPFLPの人の、リビアからの帰還釈放交渉ではないかと思う」と答え、検事は「丸岡修ではないのですか？」と、たたみ掛けました。Y証人は、「申し上げたくない」と丸岡犯人”説”の追認を拒否しました。

証言に苛立ち始める検事側

この辺まで来ると、検事は、証人が検事側にとって有利な証言をしないことに苛立ちと腹立ちを見せ始めました。丁寧だった対応も段々と糾弾的になっていきました。何故なら、”重信が、ヨーロッパに行って軍事指揮をとろうとした”という検察側が描く主旨が、欧州旅行の中心でないとすると、歓迎されない証言となってしまうようです。前回のG証言で、私が当時リビアに行く為に欧州に来たと言う事が、突然出てきた事、又、「作戦用のお金を重信さんか

ら受け取ったことはなく、お金を貰ったとしたら交通違反の立替えを支払ってもらったこと」などと証言していた為に、同主旨の証言は歓迎されていないようでした。事実の解釈は人様々に違っても、事実としてあったことは、皆覚えているものなのでしょう。

検事「証人は、パリに向かう途中、デュッセルドルフに立ち寄ったか？」

Y証人「Gから調査内容の報告を受けて、下見をする予定だった。」

検事「報告は受けたのですか？」

Y証人「受けました。」

Yさんは正確には覚えていないが、何箇所か選んだ所の調査を未だ終えていないので、下見する段階に至っていなかった。詳しく作戦想定出来る準備をしていなかった為、街に慣れる、土地勘程度の話で、デュッセルドルフに行ったことを説明しました。「攻撃対象は？」という検事の質問に、そこ迄話が行っていなかった事等が言われました。

パリでの様子

そして、更に「パリに行ってからのアパート、そこで重信被告と会ったかどうか？」「Tさんと会ったかどうか？」「重信からTを紹介されたのかどうか？」「Tから、”翻訳”という名称を聞いたのではありませんか？」「Tがアジトを用意したのではありませんか？」「Kは何をしていたのか？」「翻訳作戦の打ち合わせ会議があったのかどうか？」「パリ会議なるものが、アパートでなのか？H邸でなのか？」等質問が続きました。西谷検事は、パリでの”翻訳”作戦の謀議を確認しようとしているのでしょうか。

Y証人は、アパートのアジトでは、そうした”翻訳”作戦に関わる会議はなかった事を証言し、又、パリで会議があったかどうか分かりませんと証言しました。（前回Gさんは、アパートのアジトで会議が2～3時間有ったと証言していました。）

検事はY証人がGさんから調査の報告を受けて、「その後ペイルートに戻った後、アブハニに報告をどうしたのか？」と、Y証人に聞きました。Y証人は「準備不足で遂行不可能とアブハニに報告した」と証言し、「それにアブハニはどう答えたのか？」という検事の再質問に対して、「アブハニは報告を了解した」と答えました。すると、西川、和光が、その後、調査に行った事について、検事より質問が出され、Y証人は「その事を、全く知らなかった」と答えました。

ハーグ作戦によるY奪還

次の検事側のテーマは、Y証人の逮捕前後の状況、パリでの逮捕時の状況、ハーグ作戦が行われた状況、更にその作戦後のダマス着陸と、ダマスカスでの状況などについてと尋問が進みます。

先ず検事は、「パリでの逮捕前に重信被告、和光、T、Y証人がアブハニと話した記憶はないか？」「重信被告とTがハダドと打ち合わせた記憶はないか？」「その間、和光とY証人が別室に待機していたのではないのか？」と聞きました。Y証人は「全く知りません」と答えています。

検事「1974年7月26日パリ・オルリー空港で、捕まった事について、パリに行った理由は？」

Y証人「ワディアにアタッシュケースを運んで欲しいと頼まれたから。」

検事「いつ指示されたのか？」

Y証人「前日か前々日。」

検事「どこで？」

Y証人「ハダドオフィスで」

検事「ワディアから指示された内容は？」

Y証人「①アタッシュケースを運んで、②パリの指定したホテルに泊まり、符牒で相手を確認し、アタッシュケースを渡して陸路で戻ってくるという指示。」

検事「それまでにも、そうした仕事をした事があるのか？」

Y証人「あったと思う。」

検事「アタッシュケースで何を運ぶのか？」

Y証人「可能性として、プラスチック爆弾とか、通信文とか・・・」

検事「その時、”翻訳作戦”の指示はなかったのか？女性から偽造旅券を受け取るとか”翻訳”の報告を受けるとか、無かったか？」

Y証人「無かった。」

検事「ペイルート空港使うのに抵抗感は無かったのか？それにも関わらず行ったのはなぜか？」

Y証人「緊急と思った。」

「オルリー空港には、どの旅券で行ったのか？」「アタッシュケースの二重底から色々何か出てきたのか？」等、当時の状況のやり取りがありました。

仏警察はトルコ人民解放軍に強い関心

そして当時、仏警察は「出入国管理法違反」ということでYさんを拘束したこと、そして、仏側の取調べの質問は、アタッシュケースを渡すべき相手への興味を示し、アブハニからトルコ人民解放軍に宛て

た手紙の事が追及されたことが語られました。そして、日本語の手紙については、「仏当局から見せられたか？」という検事の質問に対し、「日本語の手紙は仏当局から質問も受けていない」ことが証言されました。「武器の一覧表は？」と検事が質問し、「あったかもしれないが、日本語だったかどうか判らない」とYさんが言うと「英語ではありませんか？」と検事。この辺は、私が逮捕されて以降取り寄せた、仏からの資料があると長澤検事が言っていたもののようです。更に、当時の仏の刑務所の状況、そこで、「誰からどのように、ハーグ作戦をY証人は知ったのか？」に、「当時ラサンテ刑務所の同房の、カナダ人がラジオを聴いて、釈放要求されている事を知った。ハーグ事件が発生したのを聞いて、アブハニが彼の部下を使って、起こしたのだらうと思った」と述べました。

「何の為に、事件を起こしたと思うか？」との検事の質問に「私の奪還を口実に、金を取ろうとしていると思った」と答えています。

奪還前後の様子、

Y証人は、その後全ての押収品を返却させて、仏からミステール機に乗せられて、オランダ・スキポール空港に待機させられた事、その間の状況について検事側から、質問が続きました。

「犯人達に投降を呼びかけてくれと言われたか？」とか「どこで、待機していたのか？」とか「早く解決せよ」とか「失敗したら自爆せよ」とか「ラサンテ刑務所に戻る」とY証人が言ったか？」とか「金をいくら運んだか？」とか「ボーイング機内の安全確認をどのように行ったか？」とか、細かく質問が続きました。

そのやり取りの後、「犯人は3人で名前は誰か？」、と具体名の確認を求めました。Y証人は「既に報道されているが、私の口からは申し上げたくない」と答えました。「何故か？」という検事に対し、「私の立場として、当時部隊の軍事責任者であった自分が、公開の場で他人に不利な事を言うという事は、人間的バックボーンを失うようなもの。これからも生きていく上で、友人、会社を売り渡す人格であると思われるような事は申し上げたくない」と応えました。

「その後、パイロット達3人と犯人達と最初にアデンに着いたときの状況はどうか？」と検事はアデンの状況の説明を求めました。「私は後部座席に居たので、対話してないし、良く分からない。」とY証人。アデンで入国拒否され、離陸を要求され、ペイルートに行こうとY証人が言って、ペイルートに向かい、そこでも拒否された。オランダ政府の交渉で、シリアが受け入れると言う事で、ダマスカスに着陸したことが尋問の中でY証人から経過が伝えられました。「シリアに着いて、所持金はどうしたか？」との検事の質問に、「ドルとか回収した手紙とか、機内に残した」ことが語られました。

その時には、Y証人は腰が痛そうで、弁護人から「腰が痛いようだが大丈夫なのか？」と心配されて、14時45分休憩が宣言され、30分後の15時15分に再開しました。

カルロスの手抜き？

再開時、西谷検事は、「シリアの空軍施設に収容されていた時から伺います。前提として犯人の名前を出すので、そこで答えて欲しい」と言い、裁判長も、それが既に前提として語られている事なので、証人の信条を損なうものでないで語って欲しいと提起しました。それを受け、了解した形で尋問が再スタートしました。

主なやり取りは、重信被告の謀議を立証しようとする質問が集中してなされ、又、Y証人の調書の内容が公判証言と食い違っている事から、作った長澤検事とのやり取りでの、調書の作成過程での発言との食い違いを問う質問が集中的に行われました。

検事「ハーグ事件は、ダマスカスに収容されていた時、誰の指示で行われたと聞いたのか？」

Y証人「和光さんがアブハニの指示を受けて、ミッシェルとカルロスと共謀して実行した。」と答えました。

検事から「重信被告の関与は？」と聞かれ「ない」と答え、更に「ハダドと重信被告の共謀はどうか？」と聞かれ、「ない」と答えていました。

そして更に、カルロスの人物について質問した後、「ハーグ闘争の作戦がどういう武器で行われたのか？」との検事の質問に、「貧弱な武器で、3人がY証人に言ったのは、カルロスグループが武器供給の約束を破ったことだった」と述べました。それに対して、検事より「どのように供給するのか？」という質問に、「詳しく知らない」と答えると、「そこが調査との違いなのか」と何度も質問されていました。「シリアの空軍施設で和光が言った事は、武器供給をネグって持ってこなかった事、カルロスが用意する武器を勝手に売ってしまったと言っていたか？」と検事が聞いていました。「和光はカルロスとハーグで会っているか？」、「西川、奥平は？」、「カルロスが用意すべき武器を用意しなかったの、和光はどうだったか？」、「カルロスを殺してやりたいといっただけだったか？」、「西川、奥平はどうか？『上手くいったから良いじゃないか』と言ったのではないのか？」という質問が続き、それに対して「それは私が言った事」とY証人が答えました。

「ハダドですが、和光はハダドについてどうだったか？」と検事。(Y証人は和光さんが凄く激怒していたと答えている)更に検事は「和光は、重信被告に対し、きちんと重信が“ハゲ”(アブハニを“ハゲ”と通称していた事が突然出てきた)、カルロスに話をつけていないと言ったのではないのか？」(Y証人は「言っていない」と答えています。)

「和光が武器調達や南イエメン政府などで重信を批判していたのではないのか？」と、追及していました。「重信被告が“ハゲ”に連絡してアデンへの着陸交渉の件で、連絡調整していないことが問題とならなかったのか？」と検事。「そうしたことはない」とY証人。ダマスカスでアブハニやカルロス、欧州、私に、和光さんが怒っていたとの話で、そこから謀議の内容として立証しようとする主旨のようでした。

「総括」会議なるもの

その後、PLOに引き渡されPFLPへ処分が委

ねられた事を踏まえ、ハーグ事件の総括会議のいきさつを検事が聞きました。

検事「いつ頃総括会議が行われたのか？」

Y証人「翌年の春頃と思う。シリアから釈放されて数ヵ月PLOに居たので、翌年かと考えている。」

検事「場所は？」

Y証人「アラブ大学周辺の、PFLPのオフィスかアパート。」

検事「総括会議には誰が出席したのか？」「総括会議の発言は？」

Y証人「和光さんがハーグ闘争の総括をした。」

検事「和光は、具体的にこうこうと言った発言していたか？」「和光は、Y奪還を成功だと言っていたか？」「和光は誰かを暗に責めるとか、なかったか？」

Y証人「全くない。」

「重信被告の発言は覚えているか？」という検事の質問に、Y証人は「覚えている点は、リッダ闘争以降も、党的にPFLPと関係を作れずに来た事、和光がアポイントを取ろうにも、アブハニが応えず、党と党の関係を作れずに来た。党の綱領規約等で闘ってこなかった事が問題で、今後討議していきたい、というような発言だった事が語られました。当時「私は軍事責任者で軍事的に成功したからいいじゃないかと発言した為、そこでは反論を言えない状況でした。そこに居た日本人革命家の芽を摘む事になった事を反省している。」と発言しました。それに対して検事は、「重信被告の発言がどこでなされたのか？」と聞きます。

検事「武器調達の発言は？」

Y証人「議題にない。」

検事「武器調達が上手く行かない事の話は？」

Y証人「和光からはあったが、重信さんからはない。」

検事「総括会議を聞いていて、重信被告がハダドに依頼したのではないのか？」

Y証人「ありえないし、ない。」

検事「重信被告の自己批判は？」

Y証人「全くない。謝罪もなかったと思う。」

検事「他の出席者の発言は？」

Y証人「私が『成功したからいい』という発言に、奥平さんも同調したことを覚えている」と答え、検事の意向と真向から矛盾したようでした。

政治、軍事、組織、3委員会は後に形成

その後、組織形態が作られたことについて尋問が



続きます。検事は、指導部本部という呼び方について質しました。「指導部本部とは南部に居て、ペイルートに行く時、本部と呼ぶ。重信さん達が、政治部門につとめる本部といえばペイルート。重信さんらに本部にいくというが、指導部という、アブハニが死ぬまで指導部でした」とY証人は答えました。検事はハーグ闘争後の3委員会制の組織に対し、政治委員会、軍事委員会、組織委員会の各機能が、それ以前の指導部、軍事とかを継承して横滑りの作られた物だという事を示そうとしました。

長澤検事の取調べ状況

このようにY証人の証言を、調書との間の大きな開きと感じていた検事側は、長澤検事の取り調べ状況について、質問しました。

検事側の主旨は、Y証人が長澤検事に任意に喋っており、脅迫されたのではなく、暴力的でもなく、逮捕された訳でもなく、参考人として、脅迫された訳でもないこと、シリアの空軍施設とかハーグの話をしてきた事とか、長澤検事自身が知らなかった事であり、自発的にY証人が喋った事である点を強調しました。そして、ツパマロスという組織自身、長澤検事は知らないし、Y証人から出た話であった事を強調しました。

それに対して、Y証人は当時、長澤が「世界のテロ組織」という本を持ってきた事、その中に、ツパマロスの事が出ていて、こういう組織がある、と長澤が義勇兵という話をする中で、事例として、中南米のツパマロスが、例えば、アジア、欧州での作戦を依頼すれば、私が行く事になるという話の例証として挙げた事が少しずつズレた、意図的な調書となっている点が語られました。

検事による圧力

検事は、今度は、弁護士とY証人の関係を示す為か、「弁護士の川村さんを知っているか？」とY証人に質しました。そして、長澤検事の尋問中に川村弁護士から電話が来た事などが示され、Y証人を弁護士が介入している事を、裁判所に訴えるような内容です。Y証人は、「私が去年11月24日から11月25日に取調べを受ける事になったので、逮捕されれば家族が大変になるので、川村弁護士に助けてもらいたい、84年出頭した時の鈴木弁護士かどっちらかに依頼した。」事を語りました。なぜなら長澤検事が「任意は強制に変える事が出来る」とか「私の所で喋らないなら東京に来てもらおう」とかY証人が喋らないので、

そう言うことを匂わせたと、Y証人が長澤検事の手法について訴えました。西谷検事は、「『逮捕する』と言われたのか？」と直截に質問します。「言われてない」とY証人が答えると、「東京地検の他、家の近くまで長澤検事が出張してきて取り調べた時、Y証人が駅まで送った事があること、自宅を見に来てくれと言ったとか、長澤検事とは、人間関係が出来ていたのではない、長澤が知らなかった事も大分あったこと。要は、Y証人が自分で喋った事ではないか」という検事の怒りに満ちた質問が続きました。

Y証人もそれまでの淡々としていた様子が怒りに満ちてきました。Y証人は、長澤検事による脅迫を語りました。「逮捕され、どのように入国してきたのかも語っておらず、出頭して、警察で未だ処分の決まっていない事もある。シンガポール事件で訴追する可能性もあるし、ダッカ日航ハイジャック事件でY証人が居たと言う証人も居るし、アルジェリア(ランディング地)で、Yを見たと言っているのも居る」と、長澤検事が言っていた事、長澤検事は「利口」だから「逮捕」は口に出さず、弱い者いじめする様子、その脅迫的な姿が語られました。

また、「帰国後、刑期を終えて、15~16年たった。出所して、重信さんが逮捕されるまで警視庁、公安調査庁、新潟県警、富山県警、内閣調査室による事情聴取が当初月一回で、それが10年以上続いている。シンガポール事件での『証拠固め』だと思う」と戦々恐々とせざるを得ない状況を、Y証人はこれまでの怒りを爆発させるように言いました。

検事は、ビックリして、(逆襲されたという風情で)「何故逮捕されるのか？それらの組織機関はあなたに接触して、情報取りが目的ではないのか？日本赤軍の動静を掴もうとして情報とろうとしてやることだ」と、逮捕すると言うのは飛躍だと言いたげに反論しました。

しかしY証人は、「長澤検事の時にも、Y証人が当時どうやって入国してきたのかを、緊急に知りたいと言う事をいつている」と逮捕と関連させた捜査であると反論しました。「長澤検事の取り調べ調書作成においても、はじめの頃ほとんどメクラ判でやっていたが、東京地検では署名拒否したのがあった。このままではまずいと、後半調書に気をつけるようになった」ことがY証人から告げられました。「何故なら話した内容とあまりに違う調書で、これに判子を押しては生きていけないと思った」点があげられました。

「一生監獄から出すな」と政治圧力が

次に村瀬検事からY証人が先に証言中に重信被告を「当初はかばうと考えず」と「かばう」言い方をしたとの事で、質問が出されました。

Y証人は、「重信さんの逮捕は予想もしなかったことだった。長澤検事が調べに来て、重信さんを一生監獄から出さないようにしろ、と治安会議、上からの政治圧力が来ている。地検の6~7人の特別班が編成され、凄く大変な事になっている。私の言った事で、事実を認めて間違っている認識は正していく方向でかかろうとしてきた」ことが語られました。

又、「重信とアブハニが指導指揮したのを認めろ」とか、かなり歪曲した調書作りの攻防が、続いた事が判りました。それは「カバウ」という言葉の揚げ足取りでした。当初は、自分の再逮捕を危惧して、穏便に対応し、調書の校正修正書き変えも言い出せない状況があったようです。そして、しつこく調書が自分の内容と違うものになっていくにつれて、逆にこのままでは、人として生きていけないと署名を拒否し、自分で点検しながら臨んでいった様子が語られました。

Y証人尋問未了で閉廷

時間が5時に近づき、次回も引き続きY証人の出廷を求めて、1月21日10時から行われる事を確認して、証人の退廷が命じられました。腰の痛みをこらえながら、顔をしかめてユックリと立上り、Y証人の退廷です。Yさんの昔の仲間達も傍聴席に居ます。Y証人は、何十年も会っていない旧友達が懐かしそうに挨拶する姿を眩しげに見て、礼をしていました。被告席の私とは、視線を合わす事無く退場しました。82年の状況は、イスラエル軍の進攻で蹂躪され、ペイルートを脱出して以降のこと。その当時、Yさんも居て語り合った頃を思い出します。当時、ゴルバチョフ路線の流れは目前にあり、これからは「正義性」が奪われる中で、どう闘いが可能なのか？変化する時代の中で、国際連帯の継続は自国内の人民の力の中にあると語り合いました。各々個々の非合法存在という否定面を持ちながら国内との共同に価値と力を見出していた時です。もっと生き様を個々自由に問い、情勢の変化の中で今迄以外の道がどうあったのだろうか？どう可能だったかと、この頃の総括と共に問い返してきました。当時を思い返しつつ、Yさんの証言を聞いていました。

閉廷が告げられ、元気での声に「ありがとう！」と挨拶をしながら、懐かしく、別れ難い傍聴席と引



2001.大晦日に

き裂かれます。時間ギリギリ迄の公判だったので、帰りは一番遅い便になったようで、東拘に着くと、6時半を過ぎていました。

途中、日比谷や銀座をぬける時、クリスマスのイルミネーションが眩しく、師走を改めて知らせています。様々な光の絵やカラーのおびたしいショッピングモールの数々。誰でもが買える訳ではないけれど、幸福感はいつでも実感出来る物に溢れている街々。

同時刻、世界の違う地域、例えばパレスチナで、若者達が健全な精神に溢れるが故に死を覚悟しているかもしれない。

西側社会の「寛容さ」が失われている今、文明の違い多元的価値は認められず、キリストの生誕の地は、戦車とミサイルと爆弾とテロルの中にあります。

新しい年は、パレスチナ・アラブの人々にとって、これ以上試練を強いる年にしてはならない！未だラマダンの彼の地を思いつつ、銀座のイルミネーションの波と喧騒をくぐりながら、夜の東拘へと戻りました。

パレスチナ 冷たき大地に根をはりて

退かぬぞと 叫びたき冬

読者からの声

非対称戦争下の2002年

支える会 鞍馬天狗

米国軍事行動の拡大

「この戦争が終わった後、世界はどうなるのだろう」とは、米軍によるアフガン空爆が始まった頃のライス米大統領補佐官（国家安全保障担当）の言葉である。そして、この戦争＝非対称戦争は終わるところか、ソマリア、イエメン、フィリピン、インドネシアなどを標的に、確実に拡大しつつある。フィリピンにはすでに400人の米兵部隊が投入され、比国軍との合同軍事演習という名のイスラム武装組織アブ・サヤフ掃討作戦が開始されようとしている。イエメンでは、01年12月18日に政府軍がアルカイダのメンバーが潜伏しているといわれている村を攻撃。米国は、作戦への参加を要求し、CIA、グリーンベレーを投入、イエメン軍・治安部隊との合同作戦を開始している。ソマリアに対しては、米英仏が空爆の準備に入ったとの報道がある。アフガン空爆開始後、米政権はアルカイダが大量の軍事物資をソマリアに移動させたと言い、「次ぎ」の候補地のひとつとして並々ならぬ「興味」を示している。ソマリアのアルカイダ拠点については、欧米の専門家の間では、既にその活動は停止されているというのが通説となっているし、現地の人達も活動停止説が正しいことを証言している。少なくとも、米国発の上記した情報は全くおかしい。軍事物資の移動が本当ならば、それを察知した時点で、なぜ攻撃しない

のか。泳がせ作戦だとも言うつもりなのか。米国はまた、送金会社アルバラカットがテロ組織に資金提供を行っていると、資産を凍結してしまった。米国は明確な証拠を示したわけでもなく、アルバラカット側に反論の機会も与えていない。長く続いた内戦のために、暫定政権が首都の半分くらいしか影響力を及ぼせない現在のソマリアでは、他国への出稼ぎによる収入とその送金は、多くの人達にとって死活問題である。実際、送金が停止されてしまったため、その日の生活に困る人達が続出している。こういう状況に対して、米国は何の反応も示していない。アフガン空爆のみならず、米国による一連の対テロ戦争には人種差別がある。

短期決定戦略RDO

アルカイダの影響ある所、世界の果てまで戦線を拡大しそうな米国であるが、勢いだけでそうしているのではない。2000年6月、ペンタゴンは、「短期決戦戦略—ラピッド・デサイシヴ・オペレーションズ (RDO)」という戦略の策定を終えている。その下敷きとされたのは、ユーゴ内戦への対応テキスト「1999年連合軍作戦」である。その中で想定された敵は、他の国民国家ではなく、ネットワーク型の「テロ」組織であり、この作戦中のC案では、該当するグループに対して、情報、政治、経済、軍事などの力を同時に使って、相手の戦意を喪失させる方向が示されていた。タリバンやアルカイダへの攻撃は、RDOの応用の一側面を持っている。

ユーゴ内戦を契機に米国がRDOをまとめたのは、湾岸戦争、旧ソ連崩壊後の世界戦略にとって必要にして、欠くことのできない事情があったからである。米国一極体制の中、グローバル市場経済を押し進める米国が、世界の各地で遭遇するものは、米ソ冷戦構造が封印していたものや米国流グローバリズムが引き起こす矛盾への、時には武装闘争をも伴った異議申し立てである。これに対処するための戦略がRDOだったのである。

9・11に対して、米国はそれを事前に察知していたことを窺わせるいくつかの傍証がある。「目撃アメリカ崩壊」(文春新書)エピソードには、「・・・ニューヨーク市警はこの朝(9・11のこと)ばか

りでなく、一週間ほど前から同じくバリエードでトレード・センターを包囲していたというのだが、そんなことはどこにも報道されていない・・・」という記述がある。さらに、筆者の知り合いのニューヨーク在住の友人が、いつも通っていたトレード・センタービルの地下に入ることを、この時期拒否されたとも言う。米当局は明らかに何か起きることを知っていた。ある程度の攻撃をやらせ、それを口実にアフガン攻撃に出ることを画策していたのだろう。

タリバン側は、オサマ・ビンラディンの身柄引き渡しをめぐる、9・11直前まで米国と米国内で交渉を持とうとしていたようである。しかし、米国は相手にせず、9・11によってタリバン側担当者は帰国してしまった。つまり、米国は、初めからタリバンに攻撃を仕掛けるつもりでいた。なぜか？

カスピ海周辺の資源争奪戦

9・11直前の米・外交問題評議会発行の「フォーリン・アフェアーズ」論文は、ブッシュ政権がカスピ海資源への関心を示さないことを強く批判する論文を掲載した。米国支配層にとって、石油、天然ガスなどは死活的戦略物資である。世界の二酸化炭素の25%を排出する米国は、裏を返せば、石油をがぶ飲みすることによって回る経済、軍事態勢を持っている。米国の全消費量に対する輸入の割合は、83年31%、96年56%と増加している。90年代後半のITバブルの頃の「根拠なき熱狂」の時代には、さらに増加しているはずである。しかもその内訳もNAFTAからの輸入は頭打ちで、湾岸地域からの輸入の割合が増大している。米国がクリントン政権時代までの方針を転換して、アラスカの自然を破壊してまで石油生産を行うとしている背景はここにある。もちろん、新たな石油資源開発が石油資本にとって「金のなる木」であることは疑いない。カスピ海周辺の石油・天然ガスに、米国は以前より着目していたが、問題となるのは輸送ルート。タリバンを育てた理由もここにある。パキスタンを通じてタリバンにアフガン全土を制圧させることが出来れば、ロシアやイランの影響を排除できた輸送ラインを確保できる。

9・11によって、カスピ海資源をめぐる状況は、大きく変化した。この地に関心を抱くのは、米国だけではない。サウジ・アラビアに次ぐ世界第2の原油生産国ロシアにとって、輸送パイプラインの不足が輸出についての大きな制約となっていた。パイプラインのルートは、ロシアの影響力の及ぶ範囲にす

るというのが、従来のロシアの戦略であったが、9・11以降の反テロ共同戦線はどう変化するか。9・11直後、最初にブッシュ大統領に電話を入れて、協同を表明したのは、ロシア、プーチン大統領であった。プーチンは、メジャーの資金とロシアによる仲介、現場での工事と管理によって、パイプラインを建設することを狙っている。大国としての権威を保つことに力点を置いて、外交政策を展開していたエリツィンと異なり、欧米への接近を強めるプーチンは、どういう戦略を立てているのか。とは言っても、選択肢は少ない。CIS全体としても、混迷は続いている。平均年齢の急速な低下、広がる経済格差、民族対立を映す凶悪犯罪の増加、「ネオナチ」は1万人を突破、ガードマンを雇わなければ維持できない市民生活・・・石油のおかげで、一息ついた状態の経済も先行きは不透明である。

米国は、アフガンでの軍事作戦を口実に、中央アジアでの存在を確立した。アフガン、キルギスなどでは、長期駐留を前提とした基地、施設の設定を進行中である。ウズベキスタンでは、25年の長期に渡って空港を使用する密約を結んだとも言われている。最近、ロシア、イランなどが、中央アジアでの米軍のこれ以上の展開に難色を示す態度に出ているが、すでに後の祭りの感がないでもない。

「非対称戦争」の一方で

米国防総省は核戦略体制を見直し、21世紀の三本柱(トライアド)として、①核戦力全体と通常戦力からなる攻撃システム、②米国及び同盟国を守るミサイル防衛(MD)網などのシステム、③多様な脅威への高い即応能力を持つ軍需産業基盤や兵器調達体制——を発表。特に③に注目しなければならない。非対称戦争も遂行していく上での新軍事産業を、何としても確立するということである。不透明であること、加えて、米国・現政権中枢は、軍需産業の重役室がそのまま横滑りしてきたような顔ぶれで占められていることから、米国は、軍拡路線をひた走るであろう。9・11から「非対称戦争」は、軍需産業にとって別の路線を導入させた。この新しい体制の下、どのような対立が持ち込まれるか。

非対称戦争の行方

米国は、どこまで非対称戦争を続行するつもりなのか。米国が「テロリスト」と断定した組織・個人を完全殲滅するまでなのか。まさか「死んだテロリスト」は「良いテロリスト」とでも呼びたいのでは



各々に
3等差
入れし
花々が
我々を
抱き合
う
2002.1.1.

ないだろう。しかし、軍需産業が経済を牛耳っている現在、これは笑い話では済まされそうにない。

現在「半テロ戦争」に悪ノリした人権侵害や反政府軍動への弾圧が拡大している。米国では、昨年11月までにアラブ系イスラム教徒の市民1100人以上が拘束されたが、そのほとんどがテロとは無関係だった。また、チェチェンでは、ロシアが軍事行動を強化。12月から1月の1ヵ月で、死者は武装勢力側92人、ロシア軍2000人となっており、現地では「ロシア軍兵士はチェチェン人男性を見ると銃を撃ちまくっている」状況が続いている。欧米はこれを完全に黙認している。非対称戦争下では、異議申立ては権力の側の問答無用の武力攻撃に晒されそうである。建て前としての自由と民主主義さえも否定するというのが非対称戦争である。

獄中雑感

吾の肩に 寄りて休める 赤とんぼ
首を傾げて 我に何問う

柔らかき 秋の日刺しに 漂える
我とつき合う 名も知らぬ蜂

目には目の イスラム右翼 歯には歯の
亜米利加テロには テロの巡り

在宮城刑務所 丸岡修

投稿

シゲに捧げる「私小説」 その6

山田美恵子

東京拘置所の中にいる友達のシゲに会うことができず、差し入れも手紙や本はだめだったので、物足りない思いで拘置所の門を出た。まだ午前10時半だった。私は帰りの道筋から少しそれて、荒川の土手の階段をあがった。階段の途中で振り向いて拘置所を見ると、古い二階建ての拘置所の閉ざされたたくさんの窓が見えた。私は土手の上までさらに階段をあがった。荒川の流れが見えた。拘置所の方を振り向くと、高速道路の防音壁に丁度さえぎられて、拘置所は全く見えなくなっていた。シゲが房の窓の隙間から、荒川の五月の緑の土手が見えたら、私が来たことが分かるのに、なんて考えたのは甘かった。私はがっかりして土手をおりた。

戦後56年がたった。堕胎が合法になり、母のような闇の堕胎はなくなった。それだからでもあるまいが、戦後日本の女が堕胎したこの数は一億を越えるという。

シゲはテロリストだと世間の人はいう。でも私は、女はみんなテロリストかもしれないと思う。ただ気がついていないだけだ。

家に帰りつくと、庭のざくろが真っ赤な花を一輪つけていた。

春は黄色い水仙や福寿草ではじまり、桃色の桜が散ってから自然界ではじめて真っ赤な花をつけるのがざくろであるらしい。友達のひとりが、な

ぜか五月のざくろの花の咲く頃、毎年心が不安定になる、といった。

母の一子が自殺未遂をしたのもこの季節だった。

刑務所から戻ってきた一子を我が家で迎えたのは、娘の私一人だった。刑務所に身元引受人として出向いたのは父であった。しかし家に戻り着く前に、父はどこかへ出掛け、母一人が帰ってきた。玄関に荷物をどさりと置き、「ただいま」といって私に笑いかけた。

兄二人は、全く頼りにならない親に無関心を装い、アルバイトに忙しく、いつも家にはいなかった。

「久しぶりに銭湯にいきたいわ。」

一子はいった。狭い借家の我が家にはもちろん内風呂はなかった。近所付き合いはほとんどしない我が家だったが、半年ぶりに帰ってきた母と風呂桶を抱えて町を歩くのは、私には抵抗があった。でもいつも一子の言葉には逆らえない私なのだった。一子が帰って来ると、家の中はたしかにそれだけで、日の光が差し込むような明るさに満ちた。

一子は、声もよく響く華やかな声だった。6歳の6月6日から、長唄を、嫁ぐ日までやっていたし、女学校では合唱部としてNHK ラジオにも出たと自慢した。ヴァイオリンをやっていた一子のすぐ上の兄の影響で、ドイツ歌曲まで歌ったりした。
(つづく)

オリーブの樹Q&A①

支える会 T・M

○重信裁判って何ですか？

パレスチナ解放闘争に連帯していた日本赤軍の重信房子さんが3つの罪状で起訴されました。①PFLP 指揮でイスラエル占領地内で闘われたリッダ闘争で戦死した奥平剛士さんの弟さんの日本出国にあたっての旅券偽造の指示。②パリで逮捕された PELP 義勇兵の日本人の奪還作戦として闘われた、オランダ・ハーグの仏大使館占拠闘争での共謀共同正犯による殺人未遂など。③2000年11月に大阪で逮捕された際に所持していた他人名義の偽造旅券です。

重信さんは③は認めて関係者に謝罪をしています。ただし①②については”無実”として争っています。これが重信公判です。

○その場にいかにどうして？

70年代に作られた共謀共同正犯という考え方を押し当てています。事件の当事者でなくても「指示した」とすれば、実行者と同罪という考え方です。そこで検察側は「指示」を証明するために、「アラブ名の命名者は誰」「指導部は」などを証人尋問で強調して、重信さんの「組織上の位置」を、25年以上前のメンバーらの供述書から印象付けようとしているのです。「ハーグの総括会議での自己批判」なるものも、重信さんの「責任ある立場」を裁判官に印象付けるためのものです。

○供述書って？

70年代に逮捕された日本赤軍メンバーの供述調書のこと。「自供書」などとも言われるものです。当時は共闘していた外国の革命組織を守るため、あえて日本赤軍が主導していたかのように言っていたことが証言されています。

○どう書いてあるんですか？

これが証人尋問のやり取りの柱となっています。調書作成時の脅迫、長時間にわたる取り調べ、誘導などで作成されたものです。これは皆が一様に今回の公判で証言しています。目的はこの「調書」を元にした、重信さんへの「国際指名手配」です。逆に言えば、それまでは「手配」できるものが無かったということです。これによって、重信さんは合法的に帰国する道を閉ざされた、と言えます。

○ホンヤク作戦とハーグとどう関係が？

ホンヤク調査とハーグ作戦の連続性がないことが公判で明らかになりだしています。ホンヤクは立案以前の初期調査の段階、実現不可能との意見もあったようです。

この時期に重信さんがヨーロッパに立ち寄ったため、ホンヤクでの関係を印象付けようとしているのです。立ち寄り目的は、実はリビアに向かうため、という証言がでています。

○ホンヤクの失敗でハーグに、と本に出てましたが？

繰り返しになりますが、ハーグ実行者の和光さんが意見書の中などでも両者に関連が無い事を証

言っています。74年当時、反米闘争としてか、ニセドルを世界各地でバラ撒こうという動きがあった、と証言されています。その一部を掴まされた PFLP は、この方法の不正義性に怒り、突っ返します。それを返しにヨーロッパに向かった日本人メンバーがパリで逮捕されたのです。それがホンヤクの作戦資金などと曲解されたのでしょう。

逮捕された日本人兵士は PFLP の軍事派といわれた国際局長のアブハニの指揮下にあったコマンドの精鋭のようでした。アブハニは彼の奪還作戦を立案・指揮します。それがハーグ作戦です。もっとも、同志奪還を口実としたアブハニの資金奪取が主眼目との見方も証言されています。ともあれ、「パリでのメンバー逮捕でホンヤク作戦が潰れ、その奪還としてのハーグ作戦」という、検察側のストーリーが、当事者の証言によって崩れています。

○アラブに連帯するとテロですか？

残念ながらメディアの論調は米国のプロパガンダに迎合している、という印象を受けます。アラブ世界では「英雄」と評価されている重信さんたちも、日本では「テロリスト」と報じるケースが多々あります。それは米国の後押しを受けたイスラエルのパレスチナ占領に抵抗するパレスチナ解放闘争に共同していたからです。最近の論調からいっても、パレスチナ自治政府をテロと断言して軍事攻撃を続けるイスラエルの主張からすれば、パレスチナ支援をする人はすべて「テロリスト」とされてしまいます。

ですから、私たちはパレスチナ問題の理解が重信裁判を見るうえで大事なものだと思って紹介しています。

○支える会は何をしているんですか？

多くの人に公判の内容を知ってもらうために『オリーブの樹』の発行、HP 作り、ビラ撒き、勉強会などをやってきました。裁判費用確保のためにカンパ集めや読者拡大が大事な仕事です。昨年は夏祭りの屋台の手伝いで資金を稼ぎました。4人の弁護士費用、会報の制作費、郵送費、重信さんの獄中での生活費などを支えるように努力しています。

日本の獄中条件は発展途上国並みです。冬場でも暖房がありません。使い捨てカイロがあります。現金購入です。貧しい人は獄中では、より過酷な生活を強いられています。少しでも獄外に近い条件にしたいです。

会は2週間に1回の集まりで、このような事を話し合っ、て、どうするかを決めています。

○どんな考えでやってるんですか？

会員一人一人違います。私は「プリズナージャーナル」7号にあったような「裁判への政治的な圧力」があってはならないという思いが強いです。自分が暮らす社会の民主主義の後退だと思うからです。それは検察側対弁護士側という枠を越えて、警察官も含めて、皆にとっての不幸につながると危惧するからです。

★今後とも、いろんな質問に答えていくようにします。どんな質問でも結構です。編集部宛てにどしどしお寄せください。

本の紹介



『文芸別冊 緊急特集 だれでもわかるイスラーム＜入門編＞』（河出書房新社）

昨年9月の米本土同時攻撃と10月の「報復」戦争開始の動きを受けて、12月に緊急出版された「イスラーム特集」。

27人の研究者、ジャーナリストが各パーツから「イスラーム」をなぞっている。そのため読者は自分の関心角度からページを開けることができる。しかし、イスラームの宗教的原理と米国による反イスラーム世界戦争を「アフガン」で解説できるだろうか。

本書には、政治的ムスレム・マスードを表紙写真に飾った編集者の「イスラーム観」を内部から突き崩す珠玉の2編がある。足立正生と重信メイだ。2人はその経歴ゆえか、「報復」戦争の「主戦場」を中東の東端より、イスラエルの一方的軍事攻撃下にある西方のパレスチナに見る。そして、「イスラエル」をキーに、「報復」戦争の本質は「宗教対立」や「民族対立」、ましてや「文明の衝突」などではない、と解く。ここにおいて、「反テロ戦争に対するイスラーム擁

護」という図式が、「反テロキャンペーン」の圏内に止まっていることがわかる。

「今回の場合、簡単なカテゴライゼーションだったのは、宗教的な戦争にすることが簡単でわかりやすい（重信メイ）、「グローバリズムに対する反グローバリズムは、人々の側からのグローバリズム」（足立正生）。

緊急特集の骨格は「イスラーム」より「パレスチナ」だったのかもしれない。

いずれにせよ、イスラームを知ること自体は歓迎すべきこと。もっとも、教理、経典と現状とがしっくり理解できる出版物が少ないのは、書斎肌の著者が多いためだろうか。宗教原理と宗教界・宗教社会の現状と関連、乖離をこそ知りたいのだが。河出書房新社からは5月に、中東取材をしたジャーナリストによるイスラーム解説書の発行が予定されている。期待したい。(T)

支える会の会報「オリーブの樹」購読案内

協力会員になって重信さんを支えよう！

会費は、月2000円です。会員には会報「オリーブの樹」を、無料で毎月郵送します。

「オリーブの樹」の「購読だけしたい」という方の購読料も、会費と同額（2000円）です。住所、宛名を明記し、代金を送っていただければ、次の号からお送りします。

いずれの場合も、会計の都合上、1年分（24000円）か、半年分（12000円）をまとめて送金していただくと、大変助かります。郵便振替（番号下記）をご利用いただければ便利です。

会費および購読料は、重信さんの支援に充てられます。是非協力してください。

また、一人でも多くの友人・知人に声をかけて、「オリーブの樹」の読者を広げていただくことを、お願いします。

次回公判日程

2月18日（月）午後1時15分

東京地裁（最寄り駅 地下鉄 霞ヶ関） 104法廷

傍聴券の配布は、開廷の20～40分前です。確実に傍聴を希望する方は、早めに地裁前に集合される方がいいでしょう。

後記

明けまして おめでとうございます。

昨年10月、「帰国者の裁判を考える会」のIさんが心筋梗塞で亡くなりました。私たち「支える会」は4月に正式発足したのですが、独り立ちできなかった当初、帰考会の仲間が支えてくれました。Iさんは入院中の奥さんを抱えて、交通整理の仕事をしながら面会、傍聴などの救援活動をしていました。心より哀悼の意を表します。

連載の「プリズナージャーナル」にあるように、裁判では重信さんが「主導」したことを4半世紀前の自供書をもとに印象付け、「共謀」という重刑に持ちこもうとする検察側の戦術が崩れだしてきています。今年の公判も注目してください。次号では裁判の要点を整理してみます。

昨年、嬉しい出会いも幾つかありました。エルサレム生まれのパレスチナ人とのハーフの兄妹が会に参加しました。傍聴にも来てくれました。現地取材でパレスチナ人たちから、「重信さんたちがすごく高く評価されてる」と伝えてくれたジャーナリストもいます。

「テロリスト」の一語で呪文にかけられたように思考停止になる「報道」がある一方、生活者の視点から、その「報道」にしたたかに「付き合う」人々もいます。呪文は解けます。その日を1日でも早めるために『オリーブの樹』を活かしていきたいと思います。

12月の法廷での証言にあったような、裁判への「政治的な圧力」は決して許してはなりません。公正さを損なった社会が、人々にとって公正であろうはずがないからです。このような「圧力」があるとするならば、それは逆に無罪であることを証明しているようなものです。

今年は正念場。さらなる支援をよろしく願いいたします。共にがんばりましょう。（高橋）

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル4階
救援連絡センター気付 「オリーブの樹」事務局
郵便振替 00110-4-613941 オリーブの木

「正誤」表

第8号(②第9号18Pに訂正あり)

①16P 右(丸岡さんの短歌2首目)

柔らかき秋の日刺しに→

～秋の日差しに～

②16P9行目

ロシア軍2000人→ロシア軍24人